

世界への挑戦：展望編

篠原岳夫

村上 健介

現在、夏のシーズンを海外で過ごす学生選手は多数いる。しかし安定した市役所での職を辞し海外に出向く社会人選手は決して多くない。篠原岳夫は2003年7月-10月シーズンをスウェーデンの地域クラブ OK Denseln で過ごした。彼は何を求めスウェーデンに向かったのか、そしてそこででの生活はどのように彼を変えたのだろうか？

2003年の挫折

彼がはじめて海外でのオリエンテーリングを体験したのは1997年のJWOC参加であった。当時、インカレ中心の観点からオリエンテーリングを見る学生の中で、常に海外でのオリエンテーリングを意識し、毎年のように海外遠征をする彼は特別な存在であった。学生、社会人と隔隔にステップを登ってきた彼ではあるが意外なことにフル代表のトリムはまだ着いていない。

篠原は2003年4月神奈川県秦野市、菜の花台にておこなわれたWOC2003選考会を8位で終える。結果、代表選考から漏れた。

「確かに代表先行で落ちたのはショックでした。ただ当時の感じとしては冷静に見たところ可能性は五分五分だと思っていました。あと、ミドルのセレクションはぼちぼち程度で、神奈川の選考会は遅かったので、『ああ、だめだな。』と感じてしまいました。だから代表になれなくても『今回はだめだったか。』といったぐらいでした。それでも1週間ぐらいは引きずりましたね。でも、『だめだったらだめだったらで次に進むか』と前向きに捕らえましたよ。」

しかし、挫折はもうひとつあった。1年間のスウェーデン留学をする予定で、3月末に川越市役所勤務を退職したにもかかわらず、もろもろの事情により留学ができなくなった。結局彼は夏のオリエンテーリングシーズンのみ北欧に行くことを選択した。



篠原岳夫 夏の遠征を経験し一回り成長した。

「これもショックでした。『何のために仕事やめたんだよ』って思いがありましたから。でも、オリエンテーリング中心として考えれば冬はオフ期ですから夏だけでも良かったんです。でもそれ以外にも語学勉強でスウェーデン語を喋れるようになったかったので残念でした。」

スウェーデンで武者修行

彼がスウェーデンでのトレーニング生活の拠点として選択したクラブ OK Denselnはストックホルムから南へ電車で約2時間のNorrköpingから西へ約20km

のSkarblackaという町にある。スウェーデンでは中規模程度の140名の会員で成り立つ地域クラブである。

そこで彼はクラブハウスに寝泊りしながら平日はクラブトレーニングを中心にオリエンテーリングをし、週末はクラブ員と周辺地域の大会に参加する日々を過ごす。

「彼らは土台が違いますね。小さいときから山でトレーニングをしている人たちですから。ただのジョギングも森の中を走るし、週に一回はクラブでトレーニングが設定されます。また、母体数が違いますからね。僕のクラブにはジュニアの世界チャンピオンがいます。クラブ創設以来の逸材です。」

彼もどこか別のところから引っ張って来たわけじゃなくて、クラブの練習の中から生まれたんです。彼はスウェーデンの国内ランキングは80位前後です。クラブではエース的存在だけど、ちょっとミスレースをすればクラブ内でも彼に勝つ人はいる。」

- スウェーデンには何回も合宿で行っていますが、今までとの違いはありますか？

「トレーニングとしては特別でしたね。期間も長いし、学生の時にはじめていったときは観光もして半分遊びだったけど、今回はひたすらトレーニングでした。心構えが違います。とにかく数多くOLをやること。自分を主張すること、自分から動いてゆくこと、気分の波を作らない。を意識しました。」

- 自分から動くことを意識したというの？

「ヨーロッパ人は決してむこうから世話してくれたりしないんです。『大会に行く？』なんて誘ってくれません。自分から『オレはこの大会に行きたいんだ、車に乗りたいんだ。』って主張しないと動いてもらえない。」

- しかしトレーニングで3ヶ月というのは長いですね。日本でも3ヶ月もあれば気分に変化が出てくる。

「確かに、3ヶ月もあると、疲れているときには『今日はいいかな？』とサボりたくなる気持ちも出てきます。でも、『何のためにオレはここまで来てるんだ？ トレーニングしに来てるんじゃないか。』と自分に言って練習しました。そうしないと結構だらけちゃうんだすよオレ。でも、逆に休む時はしっかりと休んで、翌日、午後ちゃんと練習しましたよ。とにかくダラダラしないこと、メリハリをつけることを意識しました。」

切磋琢磨の日々

- 当然、来年の世界選手権には代表選手として出場するつもりでしょうが、過去の代表選手が毎回あと一步で決勝進出を逃していることについては？

「なぜでしょうね、オレはまだ出たことが無いからわからない。でも、それが差だと思いますよ。日本の大会的な感覚なら、あと数秒とか言えるけど、その数秒のレベルが大きいのですよ。段が違うというか・・・日本の感覚での何秒というのと、スウェーデンとか北欧での何秒では意味が違うと思います。これは数秒の間にいる選手の数が多ということと、それを詰めるためにする途方も無い努力両方の意味です。さっきも言いましたが、クラブのエースと呼ばれる男がいるけれども、そのエースが10秒ミスすれば、他のクラブのエースが上に行くだけでなく、必ず同じクラブからエースに勝ってしまう選手が出るのです。た

った10秒か15秒のミスで、でもやっぱりエースはエースなんです、その15秒の差で。たまにミスはするけど、それはやっぱりたまにするだけ、大体勝っている。この層の厚さはすごいですよ。ちょっとミスすれば、ランキング30-40位ぐらいの選手にランキング200位ぐらいの選手が勝ってしまうのですよ。」

- そういった層の厚い中、しかも篠原君がまったく歯が立たないような選手がいっぱいいる。その中でトレーニングは、日本でのトレーニングと違った？

「そうは言っても、僕は僕です。僕がどうこうやっても今はそのタイム差が簡単に縮むわけではない。そうなる自分は自分でどうやったらレースでいい成績が出るか考えるだけです。もちろん走り終わったあとレースの話はしますけどね。あと、速いやつらと差はトップ比のパーセントで考えます。タイム差では考えません。」

- 篠原君が目安としていたのはどの程度？

「対トップ比で最初はまあまあ上手くいって、130%前後だったのです。でも遠征の最後は120%近くまでもって行きましたよ。」

- ということは10%の短縮ですよ。かなりの成長率ですよ。90分レースなら7分程の短縮です。

「それはオリエンテーリングが速くなったことのみで10%を短縮したわけではなく、北欧トレインに慣れたことが大きな要素ですね。多分7%ぐらいは慣れで短縮します。」

- オリエンテーリングはヨーロッパが主戦場です。2005年のWOCが日本であるにしろ、北欧トレインに対応できるのは大きな意味がありますね。

「足場とか地面の質が違っているのです。北欧は氷河地形で、日本は火山地形。海外の選手はそういった地形で走りこんで作ってきた体です。彼らの環境で練習をしていますから、森で速い走りとかも特に意識はしていないでしょうね。僕らも日本の地形や足場を想定した練習をしているだけではWOCでの予選突破も変わらないかもしれない。もっと欧州のトレインに慣れるとか、不整地での練習量を増やすとか、変えていかなければいけない。」

「今回は3ヶ月行って終わったのですが、長期のトレーニングを何回もいければ本当はいいのです。理想を言えば2、3年間に2-3ヶ月のトレーニングを毎回やれば絶対が変わってきますよ。一回でも結構変わったなと自分で思いますから。最初勝てなかったクラブの人に勝てるようになったり、全然息つくこともできなかった人にもいい勝負ができるようになってきました

から。」

- 帰ってきてからのレース感覚は変わって来ましたか？

「長いレースに対する抵抗が無くなりました。遠征中のレースってむこうのトップにあわせて組んでいるからオレ等が行くとすごく時間がかかるんです。たとえば10km前後のレースならオレはキロ8分-9分で走るけど、トップはキロ6分ぐらいで走る。毎回、毎回90分レースを経験します。日本だと俺等が90分を走るのはいせいで全日本大会ぐらいです。そういった意味で長い時間に対する忍耐力が付きました。おかげで合宿に行っても『あと1本走るとツキナ。』は思わなくなりました。オリエンテーリングの忍耐力って、いくら合宿で30分コースを3本走っても付かないです。レースの中で90分走らないと身に付かないと思いますよ。だから日本人がいて、その大会の一番長いコースに毎回参加すればいいトレーニングになりますよ。」

方向を強く意識

- 篠原君のオリエンテーリングは変わって来ましたか？

「方向を強く意識するようになりました。スウェーデンはフラットな地形が多いので、地形をたどる場面が少なかった。たとえば日本では道じゃなくて『尾根たどり』、『沢たどり』などの"たどる"場面が多いじゃないですか。スウェーデンではそういった場面がほとんど無い。本当にまっすぐを意識して進んでゆかないといけないうまっすぐ行っているつもりで進んでいると大きくずれます。彼らは正確な直進がペースにあるので、シンプルにオリエンテーリングを考えています。アタック直前まで地図読みしないとか、考えているのもアタックのことだけだったり、徹底しています。正確な直進ができないとスウェーデントレインでは太刀打ちできません。」

- 次回の2004年の世界選手権はスウェーデンですね。

「そういった意味では、すでにトレイン対応はできていますから自信があります。現地入りしてからの山への対応という作業を省けますから。」

- 現在の秋冬シーズンでオリエンテーリングが変化している部分はありますか？

「さっき言った方向への意識が各段にあがりました。脱出やアタックのときコンパスを使ってもっと方向を正確にすれば10秒、20秒すぐ短縮できると本当に考えるようになりました。」

- 今までは、それをせずにやってきたの？

「たとえば道を走って植生界との交わ

りがあったらそこから道を外れてアタックに入るとした場合、今までは道の角度に対してこのくらいで入っていけば見えるだろうってアタックしていたのです。で、実際に見えるのだけ。それよりも事前にコンパスをセットして、道と植生界の交点から入るといった作業をコンパスを一回でも使っていれば本当に最短距離でいけるということを実感しています。」

- しかしそれは学生レベルでも、ある程度の選手なら当然実行していることですよ。逆に言うと今までそれをせずにこのレベルまで来ていることに驚きます。

「でも、これを変えていかなければ上にはいけないと思っています。」

不整地での速さが課題

- こういったことの差が高橋善徳選手との今の実力差になっている？

「でも、高橋との差はこれだけじゃないと思います。あいつは不整地が本当に速い。不整地の速さはトラックでの速さとは別物なので、もっともっと不整地走をやらなければと思っています。」

- 高橋君は不整地の走りに関して日本OL界のトップクラスだけど、それでもまだまだ貪欲に追及していますよね。

「そこがあいつのすごい所なんです。外国人選手を基準においている。確かにみんな外国人選手を基準において練習すべきですよ。日本人だけを見てはだめだと思えますよ。」

- 篠原君は基準をどこにおいているの？

「それはもう外国人選手を基準においています。確かに日本代表を選ぶときは日本人のなかで上から何人って選ぶのだと思うけど、それは結果です。基準は外に置いておかないと伸びてゆかないと思います。同じ負けるにしても基準は常に外に持つ。そのほうが自分がまだまだ遅いこと意識できますから。」

- 理想のオリエンテーリングがあれば教えてください。

「オリエンテーリングの完成形は頭の中には無いですね。今の時点ではとにかく不整地走を早くなることが課題だと思っています。技術的な部分よりもまず不整地での走力です。不整地を走れないと、お話にもなりませんから。まず、足かな？」

2005年へ その先へ

- オリエンテーリングの目標は

「とりあえず2005年で終わることはありませんよ。2005年時点でもまだ28歳ですから、まだまだ速くなります。ナショナルチームとして2005年を目指すのはいい

ですけど、オレにとって最大の目標ではないですね。まだまだ続きますから。最終的な目標なんて無いのかもしれませんが、オリエンテーリングって完成形が無いじゃないですか。いまだ完成されたオリエンテーリングを見たことが無い。磐石の強さがあるわけでもない。」

- オリエンテーリングに対して多大なエネルギーをつぎ込んでいますよね。トレーニングだけでなく、留学にあたって退職したり、家族を説得、周りを動かしたり、経済的にも長期遠征となれば決して楽ではない。そこにあなたを突き動かすものは何ですか？

「一番の根本は負けず嫌いなんです。『トップであり続けたい』みたいな野心的なものじゃなくて、もしかしたら後ろ向きかもしれないけど『負けたくない』という感情。とにかく外国人選手だろうが日本人選手だろうがオリエンテーリングに関して自分より速いやつがいると『負けたくない!!』って思います。スポーツに本気で取り組む人の根底に当然あるでしょう。あと、楽しさについては陸上の単純スピード比較とは違ったどんでん返し系の面白さですね。足が風い人でも、速い人に勝つ可能性がある。そういうところがいい。可能性がいろいろ広がっているところもいい。そしてずっとオリエンテーリングを楽しんでゆきたいな。俺は世界選手権目指すというのもしんどくないとやだし、そういう第一線が終わって40歳50歳でやっていてもきっとオリエンテーリングが楽しいというのが大本にありますね。」

- オリエンテーリングが好きですよ。今までやった競技の中で一番面白い？

「はい。だから続いているし。逆に言うとならばオリエンテーリングより面白い競技に出会ったらそっちに行ってしまうかもしれないですね。でも今のところそんなものは無い。」

最高にオリエンテーリングが面白いです。」

よりタフに

篠原選手はオリエンテーリングが上手い。日本ランキング現在6位。常に安定した成績をだす。オリエンテーリングのテクニクは一流のものを持っている。オリエンテーリングの感覚、ナビゲーションのセンスには天性のものがある。しかしながら現時点ではアスリートとしての能力に見劣りすることは事実である。国内にも篠原よりタフな体力を持った選手がたくさんいる。また、同期の高橋選手と比較すると代表として国際大会を走ってはいないためか、結果を出すことに必要な自分と世界との差もはっきりとはしていない。しかし、彼は自分に足りないものを認識しているし、詰め

るための努力を知っている。何より彼はオリエンテーリングが速くなるためならどんな困難でもすすむ突破力を持っている。彼がオリエンテーリングアスリートとしてのフィジカル能力を持ったとき、他の日本人選手では開くことのできない扉をこじ開けてくれるに違いない。

(村上健介)